

機関番号：34416  
 研究種目：研究活動スタート支援  
 研究期間：2009 ～ 2010  
 課題番号：21820073  
 研究課題名（和文）  
 長崎における唐話テキスト成立過程に関する研究  
 研究課題名（英文）  
 The Making of Towa Text in Nagasaki  
 研究代表者 奥村 佳代子 (OKUMURA KAYOKO)  
 関西大学・外国語学部・准教授  
 研究者番号：10368194

## 研究成果の概要（和文）：

江戸時代の長崎における中国語（唐話）資料のひとつである『訳家必備』の内容と史実とを照らし合わせるにより、記録された時代を推定し、口語資料としての位置づけを試みた。また、複数の唐話教科書を影印、翻刻することによって、江戸時代における中国語学習がどのようなものだったかを示した。

## 研究成果の概要（英文）：

Through detailed comparison with historical data, this research reevaluates “Yakka-Hitsubi”, one of the research materials on Chinese (Towa) in Nagasaki in the Edo era. Other Towa texts are also closely examined: they are facsimiled and reprinted so that the condition of Chinese studies in the era is surveyed.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,060,000	318,000	1,378,000
2010 年度	860,000	258,000	1,118,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,920,000	576,000	2,496,000

研究分野：中国語学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：唐話 中国語 唐通事 中国語学習 江戸時代

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、江戸時代における漢語資料に基づき、当時の日本人がどのような中国語をどのように学んだかを示すことと、中国口語資料でもある唐話資料を整理することが早急に必要であると切実に感じたために、本研究を開始した。

唐話資料は、初期には国文学や国語学の分野で研究対象とされ、中国語学の立場からはほとんど研究されてこなかった。その理由は、唐話が日本人の用いた中国語であり、その資

料は中国人によって用いられ記述されたものではなかったために、中国語学の対象として用いるには不完全なものであると考えられていたためである。

しかしながら、近年、域外における漢語資料研究の重要性が指摘され、欧米や琉球の資料とともに、日本における漢語資料にもわかに注目を浴びるようになった。

唐話資料は、江戸時代の漢語資料のひとつである。唐話資料には、唐通事の会話テキストから中国白話小説の俗語辞書まで含まれ、多様かつ多層的であることが近年の研究で

指摘されているが、過去においては上述の理由により、中国語学の立場からの研究はなされず、専ら国文学、江戸文学研究の立場からの研究であった。そのため、江戸時代に人気を博した白話小説、とりわけ「水滸伝」と唐話との関連や、唐話が江戸時代文学に与えた影響については、大きな研究成果を得たと言えるが、いっぽうで、唐話を語学的見地から捉えようとする研究は行われず、また、白話小説と関連があると見られる一部の唐話資料が研究対象とされるのみで、その他多数の個々の資料の収集や分析は十分にはなされてこないうまま、中国語史の分野からは、資料的価値がないかのように見なされてきた。そして何よりも、以前の中国語学界には、鎖国政策下という外国人との接触や交流に制限のあった時代に、当時における「現代中国語」を正確に把握することは無理である、と考えられていた。

そのため、唐通事の唐話資料をはじめ、扱い方によっては、十分に中国語の口語史の研究対象足り得る日本の漢文資料の整理と分析とが進まないという状況を引き起こしていた。

研究開始当初の背景については、上に述べたとおりである。以下に、現状について簡単に触れておきたい。

中国語研究の分野における域外漢語資料への注目度の高まりは、世界的な傾向であり、これまで取りこぼされてきた資料の整理を一気に行うことにより、より多角的な中国語史を築くことが可能である。同じ域外資料の中でも、欧米資料や朝鮮資料は比較的研究者数が多く、資料の収集や整理、言語分析、関連人物の調査解明などに成果が見られるが、唐話資料に関しては、専門の研究者が少ないこともあり、進展することが出来るかどうかは、今後の努力によるところが大きい。

また、日本の中国語学界が、世界的な研究の流れの中で一定の存在感を保つには、日本における漢語資料研究を日本の研究者自らが推し進めていくことが求められていると言えるだろう。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、個々の唐話資料の編纂年代や、言語的特徴を明らかにすることによって、中国口語資料としての唐話資料の意義を明らかにすることである。

本研究は特に、唐通事の唐話資料を対象としている。唐通事は、鎖国政策のもとに行われた中国貿易の通訳であり、中国人と直に接することの出来た数少ない日本人である。

唐通事と中国人の間で話されていた言語、つまり両者にとっての共通語とは、中国語であった。彼らは、自らの話す中国語を、中国

人が話す中国語ではなく唐通事（日本人）の話す中国語であるとの認識から、「中国語」とは称さず、「唐話」と称した。

過去の研究では、唐話という独自の名称を重視するあまり、唐話を中国語と切り離し、江戸時代の「水滸伝」流行や読本の成立を促したものとして唐通事の紹介とともに簡単に触れられる程度であり、言語分析には至らないという結果を招いていたが、唐話を唐通事と中国人の間の共通語としての中国語であると見なすのであれば、唐話は十分に中国語研究の対象となり得るばかりでなく、中国口語史の貴重な資料ともなり得るのである。

しかしながら、唐通事によって残された唐話資料は、多くが刊行されたものではなく写本であるということ、記述あるいは書写した人物や年代が不詳であることなどから、言語資料として用いるには不完全な資料であることも事実であり、この基本的な問題を可能なかぎり解決しないことには、言語資料として用いることに限界があると言わざるを得ない状況である。

以上の状況を踏まえ、本研究の第一の目的は、唐通事の唐話資料が、中国語の口語資料としての価値を備えていることを指摘することとした。具体的には、唐通事による唐話資料のうち、何種類かの写本が現存している『訳家必備』を取り上げ、記述された年代と記述者を可能なかぎり特定することである。時代を特定することができれば、同時代の中国語資料との比較が可能となり、その相違点から資料の特徴を指摘することも可能となる。

第二の目的は、中国語学の観点から言語の整理と分析を行い、唐話と称された中国語の全貌を解明するためのひとつの材料として提示することである。

中国本土の漢語資料は限りがないとも言えるが、日本における唐話資料には限りがあり、すべての資料を網羅することが可能である。

『訳家必備』に限らず、個々の資料の語彙と語法の整理と分析をつぶさに行っていくことを目指し、本研究の最終的な目標は、唐話の総合的かつ網羅的な研究のひとつの礎となることである。

## 3. 研究の方法

本研究の研究目的を達成するためには、第一に資料の解読が不可欠であるので、精読を中心に据えた。また、中国語学の観点による整理と、他資料と『訳家必備』との関連の調査により、唐話資料の特徴を分析した。

### (1) テキストの読解

本研究で取り上げる唐話資料『訳家必備』

は、南方方言を含む幅広い中国語の知識が必要だけでなく、江戸時代の日中貿易の仕組みや両国の時代背景や歴史に関する知識が必要である。

資料の精読については、日中貿易や交流史の専門書に学ぶと同時に、当該分野を専門とする研究者の協力を仰ぐことができた。関西大学アジア文化交流研究センターの構成員として、研究会や学習会に参加する機会を得たことによって、中国語研究以外の分野の知識を得たことが、精読を進めて行くうえで大変な助けとなった。

特に、編纂あるいは書写年代を推定するために有益な中国人名、長崎貿易の状況（各年の来航中国船数、中国船の名称など）、来日中国人を収容した唐人屋敷内の描写などを読み解くことが、資料の編纂年代の推定に繋がった。

#### (2) その他の唐話資料の収集と整理

長崎歴史文化博物館所蔵の『訳家必備』および関西大学図書館長澤文庫所蔵の「小孩児」「長短話」「請客人」「小学生」「闇裏闇」を写真撮影し、言語比較、内容比較を行い、それぞれの資料に見られる語彙の使用状況と、描かれた内容の類似点と相違点を整理した。

#### 4. 研究成果

本研究は、次に挙げる三つの研究成果を得ることができた。

第一に、編纂、成立年代が不明であったために、口語資料として扱うことが制限されていた唐話資料を、『訳家必備』を題材に、成立年代を推定したことである。

成立年代推定の根拠とした主要な点を次に挙げる。

- ①唐人屋敷内の状況描写
- ②来航中国人の氏名
- ③乾隆帝の南巡についての報告
- ④来航中国船数
- ⑤滞在中の中国人の氏名

『訳家必備』には、新米唐通事と中国人あるいは唐通事同士の会話を中心に、中国貿易の流れが描かれている。書名が示すとおり、中国貿易に携わる通訳必携のガイドブックのような内容であるが、全編を通じて会話から成り立っており、一方的な説明書の体裁とは異なる。恐らくは、過去に実際に交わされた会話を記述したものであろう。

ただし、登場する人物名や事柄を、史実に照らして見ると、ある年一年に限定できるわけではなく、部分部分によって、会話が交わされた時期が異なる可能性があるということが分かった。描かれた事柄が事実であったかどうかを可能なかぎり調査した結果、幅は

あるものの、本資料に描かれている事柄は1750年代の出来事に集中しており、成立年代として1755年から1765年までの10年間を提示することが出来るだろうという結論を得た。

第二の成果は、『訳家必備』の資料的価値に新たな可能性を見出すことが出来たという点である。

編纂年代を推定する作業は、唐通事の唐話資料の性格を理解する上でも成果があったと言える。つまり、史実との関連によって、『訳家必備』が事実を踏まえて編纂された資料であるということ指摘することが出来たと同時に、その他の唐通事資料もまた、事実に基づいて記述されているものであると見なして扱うことが可能になったということである。唐話資料は公の文書や記録ではないため、そこに記されている内容は些末な事柄に過ぎないかもしれないが、歴史の大きな流れの中では痕跡を残せなかった個人の営みを知らせてくれていると考えられる。また、1750年代の長崎貿易の有様を裏付ける貿易資料としての価値をも有していると言えるだろう。貿易資料が豊富とはいえない宝暦年間の実態を示す資料となり得る可能性があるのではないだろうか。

第三の研究成果は、関西大学図書館長澤文庫所蔵の唐話資料「小孩児」「長短話」「請客人」「小学生」「闇裏闇」五編を影印、翻刻し、解題を付した資料集『関西大学図書館長澤文庫所蔵唐話課本五編』を出版し、貴重資料の公開を実現したことである。

この五編については、すべてデータ化し、語彙や語法の整理と分析を進めることが出来た。

先行研究では、唐通事の唐話は、ひとつに捉えられがちで、個別資料の分析まで及んでいなかったが、実際には資料によって使用される語彙には違いが見られ、資料ごとに個性があるということが分かった。この点は、各資料が編纂された時代を反映している可能性や、唐通事による唐話学習にはいくつかの系統があった可能性を示していると考えられ、今後の唐話研究全体に広がりが出てくるものと期待される。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

(1) 「近世日本における異文化知識の受容—唐通事テキスト『訳家必備』にみられる異文化情報について」、奥村佳代子  
関西大学アジア文化交流研究叢刊第4輯松浦章編『東アジアにおける文化情報の発信と受

容』、2010年、p. 55～p. 71、査読なし

〔学会発表〕（計3件）

(1) 「18世紀日本長崎的漢語世界」、奥村佳代子

欧州人的漢語研究歴史国際検討会、ローマ大学、2010年9月14日

(2) 「《訳家必備》の内容和語言—18世紀中葉唐通事的口語」、奥村佳代子

清代民国時期漢語国際検討会、韓国鮮文大学校、2010年5月4日

(3) 「唐話課本の会話文と白話文」、奥村佳代子

関西大学アジア文化交流研究センター第14回研究集会「近代東アジアにおける文体の変遷」、2009年12月20日

〔図書〕（計1件）

(1) 『関西大学図書館長澤文庫所蔵唐話課本五編』、奥村佳代子

関西大学東西学術研究所資料集刊三十、関西大学出版部、2011年3月31日、175p

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

奥村佳代子 (OKUMURA KAYOKO)

関西大学・外国語学部・准教授

研究者番号：10368194

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：